

### 第3回読書カフェ 思想史研究との出会い

桂島宣弘（立命館大学）

#### 『日本政治思想史研究』との出会い

わたくしが最初にこの本に出会ったのは、1970年代半ばの頃です。立命館大学文学部の前に、某国立大学の工学部で学んでいました。オイルショックやベトナム戦争終結といった時代で、高度経済成長が一息ついた時代でした。そのような時代に、同じアパートの隣の部屋に日本思想史研究室で助手をやっていた先輩が住んでいたのです。その先輩の部屋には多数の本があったのですが、理工系とは違った面白さを感じ、本を借りて読むようになりました。丁度就職活動で迷っていた頃、日本社会のあり方を考えるにはよい本が沢山ありました。その先輩から薦められたのが、丸山真男の『日本政治思想史研究』でした。「これを読んだら思想史研究が何かがわかる」と。

確かに、そのとおりだと思いました。この本は丸山真男氏の最初の論文を集めたものなのですが、これが丸山氏の研究の原点であり、エッセンスがすべて詰まっています。戦時中に書かれたものなのですが、日本のものの考え方は、未だに前近代的なものの考え方を引きずっていると主張していました。私にとってはこの本がこれからの日本社会のあり方を示しているように見えたのです。もっと勉強しないといけないと。そこで、その先輩に相談した際に勧められたのが立命館大学日本史研究室でした。立命館大学には思想史研究の伝統があると。そして、日本の17～19世紀の思想史を研究しはじめ、現在に至っています。

#### 『日本政治思想史研究』の意義

丸山氏の本で有名なのは、『現代政治の思想と行動』と『戦中と戦後の間』です。とりわけ『現代政治の思想と行動』には、1946年に『世界』で発表された「超国家主義の論理と心理」という論文が入っています。この論文によって丸山氏は戦後を代表する知識人としての地位を確立します。

この論文で触れられているのが「無責任制の体系」です。戦争責任が問われたニュルンベルク裁判と東京裁判とを比較しています。東京裁判に並ぶ戦争指導者たちは、責任をとれといわれるとみな横を見て、上を見る。責任をとろうとしない。このような精神構造の原因を天皇制に求めるのです。そして、天皇自身も神武天皇以来の「皇祖皇宗」を見る。結局、誰も責任を取らない。自分で判断して、行動して、責任をとる。日本にはこれがないと主張したのです。

高等学校の教科書にも取り上げられていた文章で有名なのは、「『であること』と『すること』」です。欧米では、人間の価値は「すること」によって決まる。しかし、日本は「何であるか」で価値が決まるとするものです。要するに、肩書きによって人間の価値が決まる社会では駄目だといいたいわけです。これも「超国家主義の論理と心理」と同じ論理です。みんなが上を見て、上のいうことは聞いてという無限の上下連鎖関係です。これが「である」こと。だから何かあった場合には「私は従っただけです」「悪いのは上の人間です」となるわけです。

丸山氏は、戦前と戦後の人文社会科学の扇の要としての位置にたっていると思います。日本の思想史研究は、丸山氏をどう批判するのか、超えていくのか、補充していくのかといったように丸山氏の論理からはじまっています。日本思想史研究は丸山氏によって成立したわけです。

### 「思惟構造」とは？

書名から判断すると、この本は日本の近代政治思想のことが書いてあると誤解する人が多いと思います。しかし、目次を見るとわかるのですが、書いてあることは朱子学、荻生徂徠、本居宣長の思想等です。まず、朱子学の特徴としては、道徳を核にしなが、政治、道徳、文学、あらゆる宇宙現象から人間の内面まで、鎖のように連続的に同じ原理でつながっているという構造があることです。これを前近代的思惟と定義します。こうした連続的思惟を、前近代的思惟構造の特徴と見たわけです。一方、荻生徂徠と本居宣長の思想は、この鎖を断ち切って、道徳等とつながらない政治や文学の独自の原理を主張している。丸山氏は、これを非連続的思惟といっていますが、ここに近代的思惟の特徴があるとされています。

近代社会には、非連続的思惟、自律した思惟構造を背負った個人が出てくるはずであったが、それが挫折をし、前近代的思惟を引きずったまま、明治維新が行われ、近代日本が成立してしまった。日本社会は前近代的な思惟構造に引きずられた社会であり、それが天皇制や戦争責任をとろうとしない思惟にまでつながっていると主張されています。

### 未だに大きな意味を持つ本

丸山氏については、様々な批判があります。荻生徂徠や本居宣長の思想に近代性を見ることに無理があるのではないかと、ヨーロッパ至上主義、脱亜論的な発想をすることなどです。しかし、戦前・戦後の日本の人文社会系の学問を構造的に集大成し、戦前・戦後の結節点に丸山氏がいることは間違いのないわけです。日本の人文社会科学には、大なり小なり、丸山氏の影響が数多く残されています。だからこそ、現在の日本の人文社会系の学問のあり方を見直していくためにも、丸山氏を読むことが必要ではないかと思っています。

欧米やアジアの日本研究者は、みんなこの本を読んでいます。英語版、中国語版、韓国語版、フランス語版も出版されています。それだけの影響力を持つ本なので、みなさんにも是非ともお薦めするわけです。

### \* その先の読書のために

現在の丸山真男論を知るためには、苅部直『丸山真男』(岩波新書)が一番分かりやすいと思います。丸山の思想軌跡がよく分かります。やや専門的には、子安宣邦『「事件」としての徂徠学』(ちくま学芸文庫)が、丸山真男氏の荻生徂徠理解を根底的に批判しています。また、自分のもので恐縮ですが、拙著『自他認識の思想史』(有志社)では、明治以来の日本思想史研究を、丸山真男氏を結節点として見通しています。この他、人文社会科学の方法論に興味のある方には、サイド『オリエンタリズム』(平凡社)を薦めます。丸山真男氏のもっている問題点が、実は近代学術自体の問題でもあることを考えさせられます。